木森山水道
表紙イラスト／ペコ太郎
ショタ魔王は、勇者と淫魔に迫られる
試し読み版
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ショタ魔王は、勇者と淫魔に迫られる』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

ショタ魔王は、勇者と淫魔に迫られる

木森山水道
表紙イラスト／ベコ太郎

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ベル

魔王を退治しにやってきた女勇者……なのだが、魔王を打ち負かしたあと、なぜか逆レイプしてエルビスの童貞を奪ってしまう。明るい性格で、褐色肌のグラマラスな体型をしている。

エレミア

魔王を慕う数少ない魔族の少女。種族は淫魔だが、エルビスの前では貞淑に振る舞っていた。本心ではエルビスが大好きで、エッチがしたいと思っている。

エルビス

魔王。身体が小さく、魔王でありながら魔族からは侮られて見られている。厳格な喋り方をしているものの、取り乱すと年齢相応の喋り方に。

ドグゥアッッッ！

けたたましい破壊音と共に、魔王城の玉座の門扉が砕け散る。

この世で一番硬い金属で作り、これ以上は望めないと言うまで防御魔法もかけた最後の防衛線を壊した者が、悠々と入ってきた。

「現れたか、勇者ベル」

玉座から二十歩ほどのところで立ち止まった人間が、不敵に口角を吊り上げる。

勇者は明るい褐色肌の女だった。背が高くてがっしりしているが、胸もお尻も大きくて、ウエストがよく括れている、とても女性的な身体をしている。

年の頃は二十歳ほどだろう。

強く輝く紅い目。こぼれる真っ白い歯。無駄な肉のないすっきりした頬。絵画のように端正で、獣みたいな野性味のある面もちだが、不思議と粗野な印象はない。それどころか、目と目を合わせているだけで、胸に優しい温かさを憶えてしまう。

（敵である我にもそう思わせるとは……なるほど勇者だ。まさしくだな）

魔王城の主は胸中で呟き、音を立てずに玉座から立つ。

たった一人で扉を破壊した強さも驚異的だが、目の前の女はただ強いだけではない。

初対面の敵の心さえ温かくするカリスマも備えているのだ。

「あんたが魔王エルビスだね？　魔族の総大将に知っててもらえて光栄だよ」

勇者が明るく笑い、大柄な身体を包む白銀色の鎧が小さく軋む。
ベルの出で立ちは、騎士というよりも傭兵寄りだった。
脛当と一体型の鉄靴、腰当、背当、胸当、手甲。鎧の間からは生肌が覗いていて、アンダーウェアは着ていない。どんなに遠くからでも見えそうな、肩当と一体型の真っ赤なマントもして、もっと紅い宝玉を埋めた額環を頭にはめている。波みたいに緩くうねる長い髪も赤髪で、勇者は赤と褐色と白銀のトリコロールだった。
「汝には、我が配下を星の数ほど葬られた。知らない方がおかしかろう」
女勇者は無言だった。手甲の指で顎を撫でつつ、まじまじと見てくる。
「なんだ、何を見ておる」
「いやね、想像していたよりもずっと可愛いと思って」
「……なんだと？」
「会ったことはないし、見た目の情報もなかったから、人間の王様みたいに苦み走ったおっさん魔族がそこに座ってるんだろうなーって何となく思ってたんだけどねぇ……いやぁ、ほんと可愛い。予想外な分余計に可愛い」
人間で言えば十歳ぐらいの背丈、狭く華奢な肩、抱きしめられたら折れてしまいそうな背中。全身を包む漆黒のローブを着ていてもわかってしまう、いたいけな魔王の身体に、女勇者は口元を綻ばせている。

「綺麗なボーイソプラノなのに厳めしく我とか言っちゃうのも胸にキュンとくるし、その上、凛とした女の子顔で、身体も小さくて……ドキドキしちゃうね～。まさかこんな男の子が、人間界で恐れられる魔王様とはびっくりだよ」

「き、貴様……！」

小さな魔王は女勇者を睨みつけ、鳴るほど奥歯を噛みしめた。ねじくれた本体の先にドクロをつけた魔王の杖を、小さな手のひらでキツく握りしめる。

「我が配下にならともかく、敵である汝に身体が小さいだの、若造だの、ショタ魔王だのと呼ばれる筋合いはないわ！」

「若造とショタは言ってないんだけどねぇ……でも、今の台詞で何だかわかった気がするよ。あんたも内々で苦労してるんだ」

仁王立ちするベルが、やたら優しい視線と声を浴びせてくる。

「終いには哀れむかっ。敵に憐憫をかけられるほど落ちぶれてはおらぬ！」

魔王は女勇者に向かって杖を突き出し、呪文を唱えた。

「ダビ・インフェルノ！」

杖のドクロの眼窩が、瞳を取り戻したかのように紫色に光り出す。

青白い炎が渦巻く巨大光球が出現し、弾かれたように飛んでいく。

ドゥゥゥゥゥンンンンン！

火球は玉座の間を真昼よりも明るくしていた。
立っているだけで汗を噴かせ、立ちくらみまで誘う強烈な熱波を放っている。
「いきなり最上級火球呪文かい！」
掠っても無事にはすまない光球に向かって、不敵に笑う女勇者。
背中に背負う大剣を目にも留まらぬ早さで抜き、横一文字に振り抜く。
「せいっ！」
ザパァァァァァ！
高い天井と床スレスレに飛んでいた極大火球が、真っ二つに切り裂かれた。
上下に分かれ、広間の天地を呑み込みながら奥まで進んで弾けると、出入り口付近の壁も床も扉の破片も無差別に蒸発させた。
「なに、ほんの挨拶代わりだ」
「挨拶代わりで、使える人間が何人もいない高等呪文をぶつけられちゃ堪らないよ」
火炎の残り火が背後を燃やすのに頓着せず、ベルは剣を構えた。
口元は嬉しそうに綻び、瞳は獰猛にギラついている。
全身には気力と力と戦意が漲り、近づけば一瞬で押し潰されそうな迫力だった。
「さぁて、そろそろ本番を始めようじゃないか」
「同意する。汝は我が配下を何人も葬り、魔界の領土を荒らした女。汝にしてみれば、我

は人間を葬り、人間界を犯した男。遅かれ早かれ殺しあわねばならぬ故……だが」
迷うように言葉尻を小さくする魔王。
いざ戦うと思った時、胸に湧いてきた気持ちがあった。逆鱗をぐりぐり抉られた怒りに勝り、鎮静させるほどの大きな感情だ。
「ん？」
「本音を言えば汝が欲しい。その強さ。そのカリスマ。我が財産……いや、我が持つあらゆるものと引き替えでも惜しくはないのだが。汝なら、我らへの行いを償ってあまりある成果を上げてくれるであろうから、皆も承知してくれるだろうに」
「あたしも高く見積もられたもんだ。そうだねぇ……あたしも、こんな出会い方じゃなかったら、ひょっとしたらあんたと友達になれてたかもしれないと思うよ」
敵の動きに備えて油断なく構えつつも、魔王が黙り込む。
「どうしたのさ」
「やはり欲しい……対価は言った通りだ。まだ間に合う。我のものにならぬか？」
「あはは。それでなびく女なら、あんたはそこまで欲しくはならなかったろうさ」
ベルは駆け出した。瞬く間に肉薄し、剣の間合いに魔王を入れる。
ガギィンンン！
横一閃の攻撃を、杖で危なげなく受け止める魔王。

「流石だね。本気で斬りかかって、まともに受け止められたのは本当に久し振りだよ」
「魔王の称号は伊達ではない。不倶戴天の勇者が相手なら、尚更遅れを取れるものか」
勇者はさっと剣を引き、続けざまに鋭い斬撃を放つ。
肩を狙い、脾腹に剣先を埋めようとし、左胸に突き込んで、かと思えば軌道を変えて喉笛を貫きにかかる。
ガギッン、ギィン、ギィン、ギィィンンン！
「アハハハ！　こんなに小さくて可愛い魔王様が、あたしの攻撃を全部受け流してくれる！　楽しいよ、強い奴と戦うのはホント楽しい！」
いよいよ瞳をギラつかせ、勇者はのべつ幕なく斬りこんでくる。
「むむ、こやつ、バーサーカーよりも戦闘狂なのではないか？」
「かもね。よく言われるよ。あたしは、戦うのが二番目に好きなタチだから当たってるんだろうさ。勇者だなんだとちやほやされたり、期待されたり、要望に応えるのも気持ちいいもんだけど、何もかも忘れて、こうやって強い奴と戦うのはより以上の快感さ！」
（本当に楽しそうに闘うものだな……しかも、決して凶悪ではない）
人間離れした早さと重さが一撃一撃に籠もっているが、殺意や敵意を感じない。
持ち主の高揚に合わせる風に輝く剣の刃は急所にも飛んでくるが、直前で僅かに軌道が逸れる。仮に防ぎ損ねても、恐らく即死はしないだろう。

（まるで剣の稽古だな。もっとも、我は魔王でこやつは勇者。身売りの交渉も決裂している。どちらかの死をもってしか決着はありえんのだ）

ズパッ！

数十合も打ちあった頃、魔王の肩が浅く切り裂かれた。

「どうしたんだい、動きが鈍ってるよ！」

キィン、ギンッ、ズバ！　ギリッンン、バサッ！

女勇者の斬撃は、数合に一度はローブを浅く斬るようになっていた。

（この女、何というスタミナだ。最初の一撃からまったく勢いが衰えぬ……これほどの持久力を持つ者は我が配下にもそういないぞ）

魔王は手を抜いていないのだが、これまでの打ちあいで体力が落ちている。

相手は容赦なく、苛烈に攻撃してくるので、力は削がれる一方だった。

ローブの下の身体は炙られている風に熱くなり、汗も多量に噴き出ている。

「魔王なんだろう？　もっと頑張ったらどうだい！」

「言われるまでもないわ！」

（これでどうだ、勇者よ！）

脾腹を狙った横薙ぎの一撃を受け止めた瞬間、魔王は瞳を光らせた。杖に伝わってきた強烈な衝撃を利用しつつ身体を回転させ、胸当と腰当の間、綺麗な縦長のお臍が見えるく

らいに空いている隙間――褐色肌が剥き出しの脇腹めがけて回し蹴りを放つ。
ガツッ！
この戦いで初めて見せた戦術だったというのに、女勇者は即座に反応してみせた。膝を高く上げ、足の筋肉を強張らせながら白銀の脛当で受け止めると、ニヤリと笑う。
「っう！　華奢な足なのにいい蹴りだねぇ」
なめらかに筋張った筋肉の太股の足は、押してもまったくビクともしない。
奇襲の失敗した魔王が後ろに飛ぶと、女勇者が追撃してきて、打ちあいが再開する。
（剣だけで攻撃してくる故、肉弾攻撃も絡めれば不意をつけるかと思えば見事に対応しおる……型を重んじる騎士であれば通じたであろうに……だがな！）
ヒュンッ！
魔王は、もう一度繰り返す。
「効かないってわからないのかい！」
落胆混じりの荒い声を張り上げた勇者を無視し、失敗した時と同じ風に剣撃を受け、身体を回し、蹴りを放つ。彼女も同じ風に膝を上げ、脛当で受け止めようとし――、
「バイド！」
ブンッ！
魔王が呪文を唱えると、回し蹴りの足が一瞬で丸太並に膨れ上がった。

「なんだって⁉」
防御に動いた脛当の足を巻き込みながら、魔王は女勇者の脇腹を蹴り抜く。
ドガァッ！
「ゲホッ、ゴホッ……ぅう……き、効いたぁっ……な、なんだい今のは」
千鳥足で後ずさる女勇者は、両手で脇腹を庇いながら、身体をくの字に曲げている。
身体の任意の部分を巨大化させる術は、エルビスが編み出したオリジナル。
難しい術ではなく、魔王ならば一二秒の詠唱ですむ呪文だが、魔界にも人間界にも使い手はいない。未知の攻撃手段の前では、女勇者も警戒のしようはなかったろう。
もっとも、ただ無闇に使っていたのでは、絶対に防がれていただろうが。一度余裕で防いだ攻撃を性懲りもなくまたしてきた。そう決めつけさせたからこそ通じたのだ。
最初の回し蹴りは、ここまで折り込んでの奇襲だった。最初に通じていれば術の出番はなかったが、何も不都合はない。その時には、予定通り次のことをしていたまで。
「隙ありィ！」
裂帛の気合いと共に杖を振るい、掬い上げる一撃を放つ。狙いは女勇者の手元。
ギィィィィン！
力なく持たれた大剣と杖が噛みあい、耳障りな衝突音が響きわたった。
「クゥッ、しまった！」

手甲の指でさすられていると、ペニスにピリピリしたむず痒さが起こる。
半勃ちだったペニスが、芯が入った風に硬く大きく膨らんでいく。
「や、やめろぉ……こんな屈辱……辱めをするのが勇者なのか？　うぁあァ……ぼくはお前を、敵ながら天晴れな女だって思ったのに……こ、こんな、淫魔みたいにいやらしい奴だったなんて幻滅だぞっ」
「あはは、そういう魔王さまだって、敵の勇者にオチン〇ン触られて、こんなに興奮してるじゃないの。よっぽど我を忘れてるんだねぇ。厳めしい口調もすっかり崩れちゃってるじゃないか……可愛い……ほぅら、もっと大きくしていいんだよ……あむっ」
女勇者は嬉しそうに目を細めると、魔王の逸物を根本まで呑み込んだ。
「なっ⁉　今度は咥えるだと！　お前は何を考えているのだ！　うっ、くうう、ほ、本当に勇者なのか？　さっきまでぼくと戦っていた女勇者ベルなの、ああ、うあッ！」
魔王の腰が、ブリッジする風に勢いよく跳ねる。
「し、舌がのたくってる！　ぼくのペニスがベロベロ舐め回されているぞ、ひ、ひぃぃっ、あ、あああ、な、なんだこれ！　こんなの知らない、ぼくこんな感じ知らない！」
目を見開き、変声期前の男の子のような甲高い声を上擦らせるいたいけな魔王。
ペニスを根本まで頬張る勇者は、縦横無尽に舌をしならせ、至る所を舐めている。
肉棹、皮の繋ぎ目、逆三角の牡肉塊の表面、カリの出っ張り、裏側。

ちょっとから 試し読み スタート！

剥き出しの亀頭を刺激されると鋭くて甘ったるい快美が肉棒全部を揺すぶる。中まで染みる強さで肉幹をねぶられると、じわっと後を引く悦楽が肉身を引きつらせる。
「はあっ……はあっ……なんなのだこれは、ああっ、腰が蕩けるみたいで……ッ」
股間に広がる悦楽に喘ぐ魔王は、せわしなく顎を上げ下げし、くなくなと頭を振る。
褐色の美顔を色っぽく上気させている女勇者は、悪戯っぽい目をすると、細い頬をみっともなく凹ませ、半勃ちしている肉棒を吸い上げた。
「ズズズズズズ！」
「うわあああ！　ぺ、ペニスが引っ張られる、くぅぅ、こ、腰が吸い取られるぅ！」
牡棒は表面だけでなく、芯の肉まで勇者の口腔へ引き寄せられる。ペニスを構成する肉のすべてが、男だけが味わえる快楽で満ち、先走り汁が漏れ始めた。
薄い精液ごと肉棒をバキュームされる度、魔王の頭は真っ白になり、鼻先でバチバチ火花が散る。肉の薄い[redacted]腰が盛大に浮き上がり、何回も勇者の顔を押し上げた。
チューブブラの豊胸をムニリと扁平に潰すうつ伏せの体勢で、魔王のペニスを吸ったり舐めたりしていた女勇者は、彼が大人しく喘ぐだけになった頃にようやく口を離す。
「はあっ、はあっ……すごすぎたぞ……んっ、ペニスにまだ感触が残って……消えん」
「ふへぁ……ンく、ふぅ……先走り美味しい……はぁぁ……堪能させてもらったよ……ふぅ……ん……へぇ、大したもんだね～、ココは正真正銘魔王級じゃないか。ばいどって術

はかけてないんだろう？　フフ」

自分の口と魔王のペニスを唾液の糸で繋ぎながら、勇者はにっこり微笑んだ。

満遍なく唾液を塗りたくられた肉棒は、性交可能なくらいに熱り立ち、すぐにでも射精したそうにビクンビクン弾んでいる。

「竿は、黒ずみなんかと無縁な生白肌なのに、指じゃ囲めない太さな上に、手で掴みきれない長さでさ。皮の剥けた先っぽだって、サクランボそっくりの初々しい赤みなのに、山みたいに尖って、キノコ顔負けの傘の広がりぶりじゃないか」

「はぁ、はぁ、み、見るなぁ……なんてことに……こんなの恥ずかしすぎる……けど」

フェラチオされた快感で息を荒らげながら、魔王は呻く。

ペニスに残る甘すぎる痺れが、まだまだ口でしゃぶって欲しいという情動を起こす。逃げ出したり、手でペニスを隠すことを考えるよりも、唾液でぬらつく勇者の口元を見詰めながら、しゃぶられていた時のことを思い出していたかった。

（ああ、唾で塗れて光っている……あの口の中でぼくのペニスは弄ばれて……気持ちよくなって……くぅっ、ぼくは魔王で、この女は勇者……敵同士だから思ってはいけないのに……ぼくは、もっと奉仕して欲しいと思ってる……！）

葛藤する魔王が肉棒を跳ねさせていると、勇者が妖艶に微笑んだ。

「して欲しいことがあったら、素直に言うんだよ魔王さま」

「なっ……何を言っているのだ……ぼくにはして欲しいことなどないぞ！」
（くぅっ……！　そう言ってくれても立場というものがあるではないか。魔王が勇者におねだりできるものかっ）
下唇を噛んでいると、勇者は立ち上がった。
鎧を脱いだ時のように頭の後ろに手を潜らせて髪をかき上げると、水から上がったみたいに頭を振り、豊かな髪をなびかせ、フェロモンじみた女の体臭と汗を撒き散らす。
ふわりと漂う心地いい匂いに、思わず犬のように鼻を鳴らし、唾液塗れの勃起を一段と膨らませた魔王に目だけで慈母的に微笑むと、彼の腰を跨いで膝を着ける。
「今度は何をするつもりなのだ……？」
微笑が意味ありげな媚笑に変わり、関係のない質問が飛んできた。
「ねぇ……ひょっとして、魔王さまは童貞なのかい？　オチン〇ンは巨根だけどすごく初々しいし、反応もとてもウブじゃないか」
「そ、それがどうしたというのだ？　ぼくが童貞だと、どうだというのだ？」
「やっぱりそうなんだね……魔王には女を囲う習慣はないのかい？」
「歴代の魔王や、豪族などの有力者の中にはハーレムを築いている者もいるが、ぼくにそのつもりはない。上に立つ者が欲に淫らであってはならないというのが信条だし、ぼくの見た目はこんなだから、余計にそういう部分には気をつけないと、部下はますます言うこ

とを聞かなくなりそうだからな」
「真面目で……やっぱり苦労してるんだねぇ。それじゃ、勇者のお姉さんが、頑張り者の魔王くんにたっぷりご褒美あげちゃうよ」
「ま、魔王くん、だと？　お前はどこまでぼくを馬鹿にす……ぇ……ええええ⁉」
あろうことか、勇者は下着のクロッチをずらし、女の大事な部分を曝け出した。
美しくてなめらかな肉畝は唇よりも厚く、Wの字みたいなラインを描いている。
（これが女性器なのだな……初めて見た……陰毛が綺麗に剃られてツルツルしている……なんだ、見ていると胸がドキドキして……うっ、ペニスが張りつめる……！）
無意識に見入っていると、肉花弁が細めに開いた。糸を引いて蜜の滴が落ち、真下で跳ねていた自分のペニスの亀頭に着地する。汁は続けざまに漏れてきて、ウブな先端だけでなく肉棹までもがずぶ濡れになっていく。
「早くしまえ！　自分で大事な部分を見せて、ぼくのペニスを汚してど、どういうつもりなのだ！　あ、あああああ、腰を落とすな！　そのままだとぼくとお前の大事な、うっ、くぅぅぅぅ！」
グチュリ……。
手甲の指で肉棹の真ん中辺りを摘み、固定した勇者は、尻の位置をゆっくり落とし、自身の秘裂と魔王の亀頭の先をキスさせた。

初めてペニスで触れる女の秘肉は適度な弾力があって、けれど柔らかかった。火照った体温と、愛液のぬめりも心地よく、しゃぶられていた時とはまた違う、魅惑的な快楽が亀頭に広がる。

「魔王くんの童貞チ〇ポ、すごくイキがいいねぇ。こんなに立派なオスのシンボルを使わないなんて勿体ないよ……ま、そのおかげで、あたしが最初に食べられるんだけどさ」

「ま、まさかお前、ぼくとセックスするつもりなのか……はあ、はあ……ぼくとお前は、敵同士だろう！　そんなの許されるわけがないとわからないのか⁉　うぅっ！」

「誰も見ていないここで、勇者のお姉さんとこっそり楽しもうね、魔王くん……」

勇者はさらに尻を下ろす。心地よさそうに睫を閉じ、躊躇いなく肉端を含んでいく。すっかり呑み込まれた亀頭の表面全部が、ヌルヌルの柔ヒダに締めつけられる。ペニスは火がついたように熱くなり、まだ露出している肉棹が脈動した。

「はあっ、はあっ……こ、これはなんだ……あああっ、こんな快感初めてだ……！」

心臓がドクドク早鐘を打つ。

フェラチオされていた時のように、目の前で何度も火花が散る。

もっとこの牡の悦びを味わいたいという欲望がもたげてくる。

「可愛い顔を赤くして、汗をかいて……女の子みたいに喘いで……本当に可愛いねぇ……魔王くんの童貞をもらえて、お姉さんは嬉しいよ」

膝と脛をついた女勇者はさらに腰を下げ、ズブズブ水音を立て、ペニスを呑んだ。
肉棒の根本と陰唇はすぐに密着し、大量の愛液が漏れ、ふたりの結合部を濡らす。
「う、うわあああああ！　なんだこれ！　なんだこれぇ！」
亀頭にも、肉棹の表面全部にも膣ヒダが吸いついて、ギュウギュウ押してくる。
とても熱くて、潰されそうな圧迫感だというのに、苦痛はまったくなかった。
ペニスは芯から甘い痺れで満ちている。股間の奥からは、熱い精液がこみ上げてくる風な、猛烈な情動が迫ってきて、心の中にも射精したい気持ちが広がっている。
ずりゅうううう……ズチュゥゥゥ……ズリリッ、ズリリリッ。
女勇者は股間同士を密着させた状態で身体を少し前に倒すと、彼の両脇に手を着いて、腰をグラインドし始めた。
ヌルヌルの淫唇とペニスの根元の肉が擦れあい、泥濘を踏み荒らす風な卑猥な水音が響き出す。
「ひ、ひぁああっ……はあっ……はあっ、ぁ、あああッッッ！」
（ペニスが締めつけられるっ、ヒダの凸凹と擦れあうッ！　勇者の腰が動いて、一秒ごとに当たる場所も、かかる圧力も変わって、次から次へと違う快感が襲ってくるッッ！）
肉棒は燃えている風に熱くなり、射精衝動はいよいよ濃密になっている。
思考力は格段に落ちていた。頭で幅を利かせているのは、初めて味わう気持ちのいい肉

穴の中に、溜まりに溜まった精液放出欲求をぶちまけたいという牡の欲望だった。
「すごい……す、すごいぃぃぃ、ぁあッ！　ハァ、ハァ、セックスが、こんなに気持ちいいなんて知らなかった……ああ、しゃ、射精したいっ……精液出したいっ……！」
「ウフフ、童貞だけに早くも心が蕩けちまったようだねぇ……可愛く息を荒らげて……あんなに鋭かった目も、トロンと目尻を下げて……んっ、はあぁ……いいんだよ、お姉さんのオマ〇コに、いっぱい精液を出すんだ。エルビスくんは、禁欲して頑張ってきたんだから、これくらいのご褒美はあってしかるべきだろ？」
艶やかに息を乱し、髪を緩く振り乱しながら、女勇者は甘く囁きかけてくる。
それでいて、淫猥に下半身をグラインドさせ、肉棒の射精を煽ってくる。
優しく淫らな女勇者の手管に、頑なな魔王の心が徐々にほぐれていく。
女勇者の半分ほどの背丈のいたいけな魔王は、ゆったりと根本から揺れる褐色肉果実に釘付けになりながら、本音を吐露する。
「う、うん……ぼくも、だ、出したい……け、けど……ぼくは魔王で、ベルは勇者で……ゆ、勇者のお腹の中で射精するなんて、ゆるされない、から、はあはあっ」
魔王が勇者に犯されて射精させられるなど、この上なくみっともないではないか。
自分の不名誉であるだけでなく、歴代の魔王の名前も貶めることになる。
面従腹背ならぬ面背腹背の家臣たちが、これ以上ない失態を指さし、大笑いしている様

子がありありと浮かんできた。
「我慢は身体に毒だよ……んっ、んっ、ほら、エルビスくんがガン見してる、あたしのこのオッパイを揉みなよ……好きなだけ揉んでいいんだよぉ、ほらぁ……あン」
床を引っ掻いていた魔王の素手の両手を持ち、褐色の豊胸に導いた。
乳肌に食い込むチューブブラの下に潜り込ませると、自分の手甲の手のひらを被せ、小さな魔王の小さな手に自分の胸を揉ませる。
ムニィッ……ムニニ……モミィ……モミモミッ。
「あ、あああああっ……す、すごいっ、揉んでるだけなのに手が気持ちいい……オッパイ気持ちいいっっっ！」
女勇者のバストサイズは、魔王の手のひらの数倍。とても掴みきれない巨乳だった。
表面は柔らかいのに、指を沈ませると堪らない反発力が手の中に満ち、甘く痺れる。
汗ばんだ肌が手のひらに吸いついてくるのも、伸しかかってくるようなずっしりとした重さも、弾力に富んだ乳房を揉む快感を際だたせ、もっと揉んでみたいと思わせる。
「素直に喜んでくれて嬉しいよ。あたしのオッパイは、エルビスくんのものだからね。思う存分、揉むといいよ……んんっ……んふぅ」
まったく知らなかった魅惑的な揉み心地は、頭の中の余計なことを吹き飛ばした。
魔王の誇りとか、体面とか、そんなものはもう意識にない。

この揉み心地のいいオッパイを、好きなだけ揉みたいとしか思えない。そして――、

「ああ、いいよ、エルビスくんの巨根チ○ポ、あたしの中で強張って、反り返って……んんン、ただでさえ大きいのに、もっと大きくなってる……はあ、はあ、ああン、出していいんだよ、精液っ、オッパイ揉みながら、思いきり！　魔王の童貞ミルク、あたしの、あンン、女勇者の中に、ッ、ぶちまけて！」

「うんっ、うんっ！　ぼく、オッパイ揉みながら射精したい！　このまま、ベルと繋がったまま、思いきり精液出すッッッ！」

セックスの味を知ってしまったあどけない魔王は、敵の女の肉弾巨乳を積極的に揉みしだく。彼女のグラインドにリズムをあわせて腰を振り、グチョグチョ水音を響かせる。

射精欲望を漲らせた肉棒は多量の先走り汁を漏らし、女勇者の肉壺に染み込ませている。反対に、彼女の媚肉から溢れる女蜜は魔王ペニスに染みついて、その甘酸っぱい匂いをつけていた。

結合部から滲むふたりの汁はいよいよ多くなり、卑猥な水音も高くなる。

「あああ、でるっ……でちゃうっ……ハアッ、ハアッ、ああ、出るゥゥゥッッ！」

手のひらからはみ出る弾力巨乳を揉む快感と、蜜ヒダとペニスが擦れあう愉悦が頂点に達した瞬間、花火のような火花が目の前で散った。

子宮口と密着し、グイグイ押しあう亀頭の穂先から、童貞魔王の熱いマグマが迸る。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/